

平成17年度全国都市再生モデル調査概要

1. 応募団体	特定非営利活動法人盤州里海の会
2. 調査名	東京湾に臨む盤洲干潟と港を活かした「海めぐりの里」構想・計画 づくり
3. 推薦団体	千葉県木更津市
4. 調査の対象	
(1) 対象となる行政区域名、地区名等	千葉県木更津市金田地区盤洲干潟と木更津港周辺
(2) 対象となる行政区域および地区の特徴	<p>東京湾に存在する干潟は、三番瀬・富津とここの盤洲干潟を残すのみ。特にこの盤洲干潟は東京湾一の面積を有し東京湾の浄化を一手に担っている。干潟には多くの漁師が海苔養殖・採貝等で生活しているが、時代とともに水揚げが少なくなり、後継者も減り高齢化の一途をたどっている。</p> <p>一方、この場所は国家プロジェクトである東京湾アクアラインの千葉県側接岸点に位置している。周辺の農地は「限りない発展が見込まれる地域」として、千葉県と都市再生機構が計266㍊の住宅地に向けた区画整理に着手している。しかし、計画は一向に進展せず、地区は農業・漁業その関連産業、一部観光客向け産業で生活している。</p> <p>加えて、干潟に注ぎ込む小櫃川源流部には、千葉県内でも最も深い森林地帯が残り、放置されてしまった山林が多い中でも、一部では林業として生活を支えている地域がある。</p>

本事業実施場所



- 小櫃川河口部
盤洲干潟
- 駅周辺から木更津港
- 小櫃川中間部
竹炭・竹樋の産地
- 小櫃川源流部
ハウス材木の産地



小櫃川河口部
盤洲干潟
拡大図

● ハウス・トイレ設置
場所

5. 提案した活動の内容

(1) テーマ・課題

テーマ：

首都圏に隣接したメリットを活かし、第一次産業と観光産業の有機的連携が可能な場所である。海を活かした体験型集客施設「海めぐりの里」構想・計画策定。

課題：

●仮設小屋建設工事にかかわり現場で作業を行っているとき1日に10名から50名程度訪れる。野鳥観察者・生態系調査者・アサリ漁業者・釣えさ捕獲者・ルアー釣者等々・地元住民。皆トイレと休憩所設置と伝えると喜びの意思が伝わる。仮設1年後の対応を産官民で協議して取り組むことが必要と感じる。

●エリアのほとんどが都市計画法上調整地域であり、仮設小屋設置予定場所は、河川法上の河川にあたり、土地に触る取り組みに際して、仮設の許可を得るために、相当の時間を要したが、千葉県・木更津市の担当者の意欲と理解によって実現できた。

●海辺の利用は、地元漁協が権利を持っているため、NPO法人として利用できず、組合員であるメンバーが借り受け、そこから委託を受ける形で、生物観察施設を設置することができた。

●計画策定とはいっても、自らの取り組みで出来る範囲の実施プランは描けても、大きな投資が伴うような事業プランは、『絵に描いた餅』になる。よって今回は現実的な実施計画を中心にまとめた。

(2) 本調査費による活動内容の概要

①本調査費により行われた活動内容の概要

(1) 環境学習調査

◆セルフガイドカードを整備して、初心者向け干潟探検をサポートする。

仮設小屋前には干潟の生き物を紹介するカードを置いた。底生生物を中心に季節によるカードの入れ替えを行い、観察者の利便に供する。これらカードは、メンバーが撮りためてきた、写真と解説を利用して作成した。干潟訪問者が、このカードを持って干潟に入り、知らない動植物の名前や特徴を知ることが出来る。先生がいなくても干潟を楽しむこと出来る事について調査を行った。



◆バイオトイレで資源が循環していく課程の学習機会を提供する

水を一切流さない、排泄物が発酵分解して土に帰る仕組みである廃棄物を出さないトイレ、完全な循環型を体現できるスポットとして、バイオトイレをレンタルで設置し、循環型体験の調査を行った。潮風に強いというカラマツ材で壁面を被った、見た目の美しいトイレである。レンタルに際して、企業からは、体験学習のプログラムに使って欲しいという申し出があり、当法人からは、それ以外の申し出を行い、互いに設置後の利用について確認を結んだ。



(2) 人工コンブを用いた生物観察

◆人工コンブを用いた生物観察施設設置

金田漁業協同組合員から借り受け予定の海面区画に、ゴム製の

「人工コンブ」と炭素繊維を設置し、海藻を付着させ魚介類の生態を調査する。干潟に人工の「磯の森」を出現させ、新たな生物観察環境を整えるとともに、親水性の観点からの新しい楽しみ方による集客可能性の施行試験を実施した。



◆調査の仕方

人工コンブの表面に付着した生物の量と種類を目視により調査する。調査頻度は1回/月とする。同時に写真撮影を行い、記録を残す。砂中はアサリ等の貝類の調査を50cm*50cm枠の範囲の中で調査する。海面区画25㎡の中は魚類の調査を行う。目視で種類と大体の大きさを記録する。



(3)「東京湾再生」をテーマとした集客事業計画立案

木更津港や周辺公園、JR久留里線等と絡めた、小櫃川流域の海と山をつなぐ自然を生かしたプランについての検討を行った。これらは海めぐりの里実施計画に反映させた。

【18年度以降の取り組む体験型プログラム】

◆干潟とその周辺を使う体験型プログラム

これまで当NPOが取り組んできた体験型プログラムは以下の通りで

ある。

- 1) 絶滅危惧種アサクサノリ復活プロジェクト実施中
- 2) 盤洲干潟探索ガイド親子（大人子供）むけ実施
- 3) 簀立漁（遊び）交流会
- 4) あさり漁師体験受け入れ
- 5) 海苔手すき天日干し体験受け入れ
- 6) 干潟 WEB 講座通年実施
- 7) 山と海をつなぐ房総体験ツアー受け入れ
- 8) 海苔の歴史から見た東京湾再生プロジェクト実施中【お台場海浜公園にて総合学習／多摩川河口アサクサノリ探索会】
- 9) 週末漁師案提案【東京湾内の人工干潟に、市民指導型の漁業権を作り保全する案】

さらに、18年度は本事業を通じて新たな取り組みをくわえていく。

- 10) 干潟探検とミニ水族館
- 11) 森・川・海のめぐりを体感（小屋の材木・山の役割展示）
- 12) 江戸伝統の脚立釣り体験
- 13) 小中学生向け干潟の勉強会
- 14) 既存商業施設にて海苔つくり体験



◆人工コンブ生物観察施設を使うプログラム～天然水族館～

干潟に人工コンブで磯の森をつくり、集まる魚を見る。人工コンブ設置周囲を網で囲む。網で囲まれたその中に参加者が入り、天然水族館のはじまり。観察にはシューノケルを利用するので、水中に目を向けたまま継続呼吸ができるので、海の中を落ち着いて観察することができる。

- 1) 天然水族館～セルフガイドカードを使った取組み
- 2) 天然水族館～実体顕微鏡を使った取組み
- 3) 天然水族館～ガラス製観察容器を使った取組み
- 4) 天然水族館～携帯型水槽を使った取組み

◆久留里トロッコ列車計画

木更津駅から亀山駅をつなぐローカル線の久留里線は小櫃川と並行して走る列車。JRに対してトロッコ列車計画提案書を提示し、打合せを実施した。3年後には干潟や港湾も含めたコースを作成し、海辺体験と森林体験を久留里線でつなげた、関東周辺の修学旅行受け入れプログラムをつくる。

◆港活用計画（6．関連活動実績参照）

（4）利用者に対する評価アンケート調査の実施

調査事業終了時点で、干潟利用者の本事業への評価と干潟利用への意見を聞いた。

（5）会議の実施は以下の通りであった。

7月20日 第1回会議 君津信用組合にて 参加者15人
12月10日 第2回会議 上総わくわくにて 参加者25人
1月14日 第3回会議 森林塾かずさの森にて 参加者12人
2月17日 第4回会議 盤州里海の会にて 参加者6人
3月25日 第5回会議 盤州里海の会にて 参加者14人



（6）仮称）海めぐりの里協議会の設置

ビジターハウスの運営と海めぐりの里計画の推進を担う協議会の設置に向けた体制を整える。

②本調査費以外の財源を投じたり、あるいは経費をかけずに、本調査の一環として行った活動内容の概要

（1）環境学習調査及び仮設小屋設置

◆仮設小屋

干潟入口付近に仮設小屋（トイレ含む）を設置し、小櫃川河口干潟の探索・調査など生態系学習を行う人々の利用に供する。これまで夏の日差しや冬の寒さを防ぐ場所が無く、またトイレも存在しないため、干潟清掃や野鳥観察時の避難所としても必要となる。仮設小

屋は小櫃川源流域から切り出した材木を利用したログハウスとすることで、漁業にも大切な森・川・里・海の連携の重要性を広報し、参加者自らが体感することとなる。

<設置までの流れは以下の通りであった。>

9月 亀山の山林にて、材料の切り出し作業、葉枯らし・・・写真1

12月8日 現地測量・・・写真2

2月2日 仮設許可下りる

2月21日 整地作業

3月11日 基礎工事

3月末 ビジターハウスの完成・・・写真4



写真1



写真2

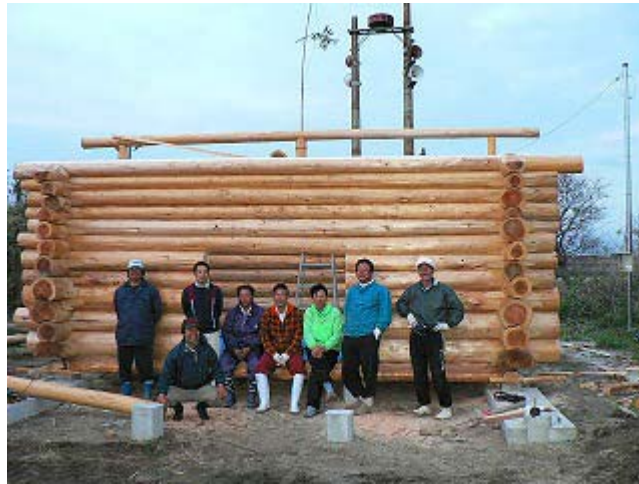


写真 3

設置作業に勤しむ里海の会メンバー



写真 4

6. 本調査の成果等、本調査の実施課程で顕在化した課題など

成果

- ◆ 18年度以降の取り組む体験型プログラムの中身が出来た。
- ◆ バイオトイレのメーカーや地元林業との間で、相互の仕事に通じるような継続的な連携の見通しが立った。
- ◆ 海めぐりの里のイメージに近いモデルをスタートできた。

課題

- ◆ 事業の維持継続（資金を含めた）体制を確実に整える。今回の設置許可は仮設であり、1年の間に本格設置できる場所を確定し、移設し継続使用していく。移設費にくわえ、最低年間100万円の維持費を確実に捻出する仕組みをつくる。
- ◆ 首都圏各地と木更津駅～港の集客プラン、干潟のプランおよび房総全体の受け入れプランを融合させて、人の回遊性を大きく作っていくための仕掛けを同時に研究する。